

5913

才

伊勢州
伊勢の
伊勢の
伊勢の
伊勢の

伊勢
伊勢
伊勢
伊勢
伊勢

古まつ澄せてるや長りけり
 濁りけりあやふしきまはるこころの
 心
 海千のこまきまのうめくさ
 大は
 けれぬままこころのちか
 想
 みこころまへにせいのちうりや
 三
 むねのくちうらむつてはむら
 社
 盛列と盛りのちうりこころ
 三研

江戸本無三郎
 三研
 無常十百子

俳諧平四帖

伊果の巻

仙臺権洲撰



伊果の巻

かむのま



乾坤名不揚物皆
食居胡奴教神紙



文にゆまほり

山々をわきのちまみしや

昔

此まうーをまみふー即ち流

唯洞

まわくこまわけて白木檜山をか

大和

さかしてて栂も山はまのりるを

大津

山々の帯あしくとうけり

飯サ

如き登りてぬゆきもるも山はうか

翠巖

入もす山まふあつーわきもり

鶴ま

山行記
一衣のぬせさるのち 魯王

影をつく小庭まてま月夜少 秋香

山もせ秋もあまふち耳ふら 秋香

ふゆらのふゆまてまあちあち 言志

雲もわく春うや山はまほ 櫻胤

ふもわく秋もあまふちあち 唯洞

谷のふかき深きうもまの橋ふら 素夜

川もや山もあまふちあち 末二

樹のこころを夜にまの秋 醉月

露もまの露水さうの人の影 秋車

山もはまもまの法法の月日 壬子

花のまの人のまのふらうも 現毛

冬もまのまの二も師もまの猫 羅州

雪もまの雪のまのまのまの 云水

白もまの雪もまのまのまの 一書

田もまの雪もまのまのまの 末二

湖の大智とてり答ひしり 三首 千彩

しうむく厚と思つておぼろ母 仙舟 叔夜

我言やまはばさして折るはく 五首 香月

柳らつ葉もろけし舟の風 全 武川

松もて印しむにすく秋あや 仙舟 栢英

聖合やあやをなすのあや 五首 子春

揺らやあまへとてく火の時 全 信申

花あやや舟の風とてく月夜 全 香史

この時をいかにいかにいかに 全 文好

随人の時りさるるやほくま 全 葉更

水気舟の月夜もおぼろ 全 権綱

一つおぼろも誰もさく 全 大和

舟人の夜くらげ 全 岸池

舟にけりや語の美 全 寄山

山侍のあやとく 全 葉舟

栢柳この一里八 全 士朝

つゝのちやなむらう毛言おはし 天外

あゝのちやなむらう毛言おはし 乃丸

山法のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

種のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

いゝのちやなむらう毛言おはし 乃丸

わきれて山のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

なしちやなむらう毛言おはし 乃丸

雪のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

雪のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

葉のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

秋風のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

石毛のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

柳のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

中二のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

遠堀のちの水を乾のちす柳のちのち 乃丸

海のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

雪のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

雪のちのちやなむらう毛言おはし 乃丸

たぢの秋神あきのかみもあるてゆはせよたの 又ら

涼をとりふりつ鼻月の面の人あま 揚丸

たすくはて橋上すまや小豆粒あま 呂伴

櫛の大乳膏のぬ人もかきうり別あま 圭子

栝棟まはりひのそふなりよかあま 理つ

あま草の代はまもまのうらこふいあま 玄也

あまの月の高きうらやけの陰あま 高源

たさうの河あてねむりあはれとあま 夏吉

山やまのちちここいいれれままををままくく あま 夏吉

あまゆきを掃さちちあま 如こち あま 涼堂

とらげやまのうらあまの人てありあま 徳興

さみだれやれちくまも人のうらあま 赤北

美の風存の足よりあまあま 久光

櫛さついでしてりの入すあま ね時

風のたけいあまいさる人の言 あま 唯湖

宵つさるる言と向つて赤北あま 二条

桂 20 頁 二十五

前山の里 八〇

香くを挿ふし月の輝く 葉玉

ひらまつ 柳を古一 松のまを 輪馬

湖底までたさるなぬよ小島人 一葉

鶴列く山田の水とく 一葉

りく 八葉花

切株の草 唯園

老松 大阜

星のち 白紙

葉のち 唯園

葉のち 唯園

あ 唯園

百合の香 唯園

柳の花 唯園

香 唯園

く 唯園

おろしはものゝろく 枇杷の茶 中二

はの池まきやをわの柳十 柳の

さつ白な花のぬきつや柳の十 杜若

春十 春のあつちつて十 春

あつちつてのあつちつて十 春

わつちつてのあつちつて十 柳

あつちつてのあつちつて十 白米

あつちつてのあつちつて十 春

十

方々の透せてるや 春

雨のつらみをさしとるまのこころの

みくせ 春

月秋のままにへまのやま

みくせのままにへまのやま

春のままにへまのやま

春のままにへまのやま

春のままにへまのやま

下^レびしき^レき^レの^レり^レこ^レめ^レり^レ而^レ 吉列
 うい^レや^レば^レち^レさ^レき^レふ^レさ^レき^レや^レし^レ 石巻 勢坂
 未^レ根^レし^レ咆^レつ^レる^レや^レ河^レ水^レの^レ鳴 長坂
 却^レる^レや^レ枯^レ枝^レま^レま^レて^レ入^レる^レ流 杜井
はのし^レり^レま
 昔^レも^レ二^レつ^レつ^レい^レく^レほ^レく^レま^レん 赤橋
はのし^レり^レま
 徳^レと^レて^レち^レく^レそ^レの^レま^レき^レこ^レん^レ 赤坂
 橋^レつ^レま^レて^レち^レち^レの^レ河^レ原^レを^レく 武川

神^レち^レや^レ遊^レち^レし^レは^レ武^レの^レち^レ 赤坂
はのし^レり^レま
 雲^レの^レ信^レ春^レの^レあ^レの^レち^レの^レち^レり^レう^レま 赤坂
はのし^レり^レま
 花^レの^レ鳥^レの^レあ^レい^レつ^レい^レか^レさ^レの^レう^レち^レ 赤坂
はのし^レり^レま
 鶴^レの^レあ^レき^レ林^レ白^レや^レけ^レり^レ候^レら^レう^レ 大目
はのし^レり^レま
 相^レを^レて^レも^レあ^レく^レあ^レる^レ石^レの^レ目 大目
はのし^レり^レま
 酒^レも^レ神^レの^レけ^レり^レう^レね^レの^レち^レ 赤坂
はのし^レり^レま
 雲^レも^レ反^レを^レた^レけ^レう^レや^レ時^レの^レち^レく 杜井
はのし^レり^レま
 海^レと^レ橋^レを^レつ^レつ^レて^レさ^レり^レ加^レ時 巴解

葉山はやまともそゆほとも木むきむむ若のわか所ところ 松まつは
うま人ひと 學まなぶぶるるとと松まつととななすすくくとと 方かたは
まままとと山やまととりりてて松まつのの流ながれ
香かのの柳やなぎののゆゆりりやや花はなののまま 松まつは
女メささくくゆゆちちやや日ひのの入いりり松まつのの風かぜ 葉は英えい
ままくく松まつやや鳴なりめめととししりりふふ葉はのの音ね 二に松まつ
存ぞん形ぎやうのの鳴なりととままくく山やまののくくれ 杜と嶺りやう
ふふくく山やまのの鳴なりととままくく山やまののくくれ 二に松まつ

蕨あずき

命いのちととはは折おりりききぬぬととやや松まつをを 赤あかい
二にののたたままここほほれれととやや松まつののまま 長ながい
ままがが千ちややひひちちととああままのの一いち世せ草くさ 吐はけ
蛤かきののままままととくくくくくくくくくくくくくくくくくく 十じゅう

秋あき合あ合あ年ねん香かう水すい

鶴つるをを朝あままままととままとと考かうをを安やす女に 真まことのの境さかい
ああららのの松まつををけけららせせくく川かわ 長ながい

時をわたりとて時をのちるなり 松和

死をいと許せしむる業をい 二系

おとそをいひ能をつくらう利 竹片 杖史

百非 竹片

頭もわたりてやうすを 一頭

救 言はる

誘ふるす誘はるす 赤もみち

福くし今やせよとらてせまらう 豊秋

初年や五重へとも 花

神試 さし

本若やゆ時う 花

おすのこ月もねう 花

去るしやわのこ 花

物のみれ生れ 山定

物のみれ生れ 山定

芒も春乃さうらふ白れ天の川 雪 雪
福も人今やあり今もいよと 唯 唯

旗 の 四

さきを先の前逢うけりもゆり花 酔 酔
神すりふ替りて語や本仮の心 五 五
枝のうらうらんとや替る心 芳 芳
古まこととわきて居れど心を 唯 唯

追加 十二

雪をさうらびせうりあうつ あ あ
あては月影を あ あの花 里 里
枝や新いゆわさつりの影やし 故 故
あゝ雪もまゝあつたふゆもあ 二 二
おうねと三身の内を柄の 一 一
うらみの鳴とてあま あ あ
枇杷花をま あ あ
人あま あ あ

おとめの秋とてつとつと三日月
はくつと月夜を照らすや 大月 松が
ほ月のひかりをその柱すけ 松 人も
ほの月夜を照らすや 松 人も
松のひかりをその柱すけ 松 人も
松のひかりをその柱すけ 松 人も

二葉

Handwritten text in a cursive script, possibly a list or account, enclosed in a rectangular border. The text is written on aged, stained paper. The script is dense and difficult to decipher, but appears to be organized into several lines. There are some large, dark ink blotches at the top of the page, possibly from a stamp or seal. The paper shows signs of significant water damage, particularly on the right side.

法苑珠林

十卷の景物

牙橋